



を効果的に学びに

本プロジェクトに参加することで学生が身に付けられる「3つのこと」を設定。また、様々な「体験」が効果的に学びにつながっていくよう、プロジェクトを設計した。



本プロジェクトで 学生が身に付ける3つのこと

第一部から第三部までの本プロジェクトを通して、参加学生が身に付けることを3つ設定した。最後に、この「3つのこと」が身に付いたかどうかをアンケート調査で測定した。

※調査結果は P.41 参照

1

地域の課題解決に役立つ知識を増やし理解力を高める

宮古島市での「『小さな拠点』づくり」の取り組みに参加することで、離島・過疎地域の地域課題を、身近な問題、現実的な問題としてとらえ、考えることができるようになる。

2

各種取り組みを客観的に評価する力を付ける

島根県奥出雲町での「しまね田舎ツーリズムモニターツアー」に参加し、地域づくり先進県における地域課題に対する取り組み事例を学ぶことを通して、地域課題への各種取り組みを地域外部からの視点で客観的に評価する力を身に付ける。

3

企画提案力を身に付ける

他地域での事例などを参考にして、宮古島市城辺友利地区の地域課題に対する解決提案をとりまとめ、プレゼン形式の報告を行うことで企画提案力を身に付ける。



本プロジェクトを効果的に 学生の学びにつながるために

学生と受け入れ地域との交流を円滑にし、効果的に学びにつなげることができるよう、今回のプロジェクトでは段階ごとに様々な施策を導入した。これにより本プロジェクトが一過性のものとならないようにした。

オリエンテーションの実施

プロジェクトの目的を明確にし、皆で確実に共有

オリエンテーションは、2月15日(水)、16日(木)、17日(金)、20日(月)の計4回、304教室で行った。プロジェクトの内容や目的を明確に説明し、それを参加者がしっかりと共有するように徹底した。地域の活性化策の提案という目標の重要性と同時に、プロジェクトにおいて学生が何を学ぶべきかという点についても強調した。もちろん、学生同士のコミュニケーションの場ともなった。オリエンテーションでは、各地域の資料に加え、独自に制作した「しおり」を配布し、常にプロジェクト全体が俯瞰できるようにした。



写真左から、「しおり」「オリエンテーション会場内」「オリエンテーション進行中の様子」「ロゴが入った旗を持つ参加学生」「会場入口」

学生と地域の方とのコミュニケーションを促す

学生と地域の方との意見交換の場を数多く設定

学生と地域の方が直接対話したり意見交換ができる機会をできるだけ多く設定した。まず第一部の宮古島市と城辺友利地区では、座学式の研修、意見交換会、懇親会、そしてプレゼン発表における質疑応答などを実施。第二部の島根県奥出雲町では、座学式の研修や地域の取り組みの視察、他大学生との交流、懇親会を行ったのに加え、宿泊先等で地域の方の生活に触れながら地域の実態が学べるようにした。



写真左から、「第一部 宮古島市での研修」「第一部 友利地区での研修」「第一部 同地区での懇親会」「第二部 奥出雲町蔵屋地区での懇親会」「第三部 プレゼン」

ワークショップの開催

2種類の作業を基に、体験したことを自分の言葉で表現

ワークショップには、個人とグループの2段階の作業を導入した。①一人でワークシートに記入し、自分の考えをまとめる。②グループで見たり聞いたりしたこと、感じたことを付箋紙に書いて模造紙に貼り出し、さまざまな意見を述べ合う。これにより思考力を高め、体験した内容を自分の言葉で表現する能力を養う。



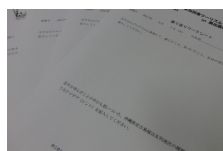
写真左から、「ワークシート例」「第二部 振り返りのワークショップ」「第二部 同ワークショップ記念撮影」「第三部 プレゼン準備の様子」「同」



振り返りシートへの記入

深い学びにつなげる振り返りの時間

非日常体験に忙しい学生たちにとって「振り返りシート」への記入は面倒なものかもしれない。しかし、本プロジェクトで最も重視したのは、1日の研修が終了した後に「振り返りシート」による振り返りの時間を設定し、その日の記憶が鮮明なうちに体験で得た自分の考えを書いてもらい、より学びを深めることであった。これは事前に受け入れ地域にも伝え、必要な場合は追加情報をもらうなど、振り返りシート作成に協力して頂いた。先のワークショップと併せ、参加学生の主体的な学びの場を作り上げていった。



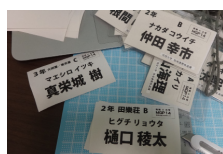
「振り返りシート」

各学生が記入した
実際の振り返りシートは、
P.53 を参照

名札を外さない

地域の方との円滑なコミュニケーションのために

名札は自己紹介をする時などに役立つ大切なコミュニケーションツール。学生は、漢字名とふりがな、学年などを印刷した名札を見やすい位置に常に付けるようにして、地域の方とコミュニケーションを図った。

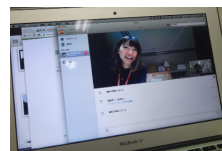
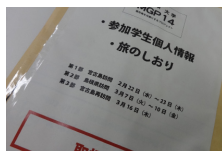


「名札。教員の分も作成」

受け入れ地域との緊密な連携

地域と学生、双方のニーズを把握したプログラム構築

受け入れ地域との緊密な情報交換に務め、地域と学生、双方のニーズをしっかりと把握したプログラム構築を行った。例えば第二部では、「琉球大学+プログラム主催者+受け入れ地域担当者」の3者の連携を緊密に図り、3カ月程度の時間をかけて、地域の現実をいかに学生の学びにつなげるかについて意見を交換しながら体験プログラムを構築した。また、プログラムにおいては、学生が無理なく安全に、安心して参加できることにも留意した。事故や怪我の恐れがないようにプログラム内容を吟味するのはもちろんのこと、アレルギー情報など参加学生のプロフィールも把握し、受け入れ地域と調整を行った。



写真左から、「(公財)ふるさと島根定住財団来沖」「アレルギー情報などの個人情報の共有」「本プロジェクト内容の共有」「連日の Skype ミーティング」



第二部受け入れ団体の声

UI ターンの促進と県内定住を目指して3本の柱で事業を展開する（公財）ふるさと島根定住財団では、活力と魅力ある地域づくりの促進として「しまね田舎ツーリズム」という事業を行っている。これは地域の人々との交流を通し、島根県の自然、風土、歴史、文化、暮らし等に触れ、島根ならではの魅力を体験してもらうものである。もっとも、当初は学生の民泊の受け入れに、「事故やケガをしたらどうしよう」と不安を感じるなど、あまり乗り気ではない地域の方々もいらした。しかし、今回の3泊4日の学生受け入れを通し、地域ならではの体験の提供や学生との意見交換、交流を行うことで、生きがいや地域の魅力を再発見するなどやりがいを見出し、今後の民泊受け入れに向け体制整備を行うなどの動きが出始めた。学生の受け入れが地域やその地に住む人々にもたらした効果は大きく、今後も継続的な受け入れを行なっていくと同時に、ご協力いただいた琉球大学の皆さんに感謝したい。

（公益財団法人ふるさと島根定住財団事務局次長 樋口和広 / 主事 岸本佳美 / しまね田舎ツーリズムコーディネーター 山崎紀明）

学生の声

※原文ママ
※他の学生のコメントはP.53の「振り返りシート」を参照

●参加学生男子

今回のプロジェクトに参加してみて地域づくりの大変さという事に気付かされました。自分が何かをすれば地域が変わるという事ではなくて地域住民が一体となって行わなければ意味がないです。島根に行ってみて外から見た沖縄、宮古島というのを知り、宮古島の地域振興のヒントになりました。発表も好評を頂いたので自分の自信にもなり、また次回も参加したいなと感じました。

●参加学生女子

地域づくり、地域おこしについて、真剣に考えることができるよい機会だった。でも同時に、地域の方々はどう感じているのか、生活圏内に入り込むことのむずかしさも感じた。

●参加学生男子

地域について考えるということだけでなく、多くのことが勉強になりました。過疎化という問題は、今からの日本に切っても切り離せない問題です。その対策、受け入れ方を考えている人々と関わったことは、これからの人生で何かしら役に立つだろうと感じました。また、普段は関われない他学部の人や他県の人と関わったこともこのツアーに参加して良かったと思った点でした。

引率教員の声

このプロジェクトは正課外実習のため単位は与えられない。しかし学生からは、「単位関係ないです」「このプロジェクト楽しいから」という嬉しい声が集まった。今回、社会の現実を知ることが効果的に学びにつなげられるよう、数々の工夫を随所に凝らしたが、こうした声はその成果の現れともいえよう。工夫の1つに、「地域づくりとは」「地域活性化とは」など、巷で言われているような解説を学生に事前に与えずにプロジェクトをスタートさせたことが挙げられる。参加メンバーは心理学や農学、理学を学んでいる学生で、地域問題については初めての者ばかりだった。しかし、島根滞在二日目には、地域の人々と生活を一緒に体験する中から「地域に関わるとはどういうことか」への理解を深めていった。そして「今いる地域住民で何ができるのか」「誇りを持つことが大切なのでは？」などといった感想が振り返りシートに登場するなど、自分なりの発見をし、課題解決へアイデアを芽生えさせていった。最後の宮古島での発表は、「真摯な提案」と評価され、それが学生たちの自信につながっていったようだ。今回の地域だけでなく自分の住む地域の問題にも目を向け始めている学生も少なくない。

（地域連携推進機構特任准教授 空閑睦子）

